慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	邦彦王行實(久邇宮家御編纂)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.217(779)- 218(780)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0218

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

サイキス・タスク（フレイザー著 永橋卓介譯）

この書は Sir James George Frazer の Psyche's Task—A Discourse Concerning the Influence of Superstition on the Growth of Institutions の飜譯である。

著者フレーザーは言はずと知れた民族學界の大御所、前世紀の終り頃から現在に及ぶその業績は非常な量に上つてゐる。勿論今日では方法論的に多くの批難をうけてはゐるが、多かれ少かれ彼の影響をうけない者はないと言つてもよからう。それ故彼の著書は民族學史上最高の位置を占めるものであるし、のみならず、その學説中には尙ほ價値を保つてゐるものも少くはない。謂はゞ彼の書は民族學における古典である。わが國の一部でもてはやされる機能學派も、その源泉は彼に在るといはれる。人類學派への正しい理解は民族學への第一歩である。たゞこの派の著書は幾多の例を引用する所から兎角尨大になり勝ちで通讀に堪へない憾みがある。その間にあつてこの書はフレーザーのものとしては最小の部に屬する。

本書は、未開社會において政治・私有財産・結婚・人命の尊重等に對し、俗信が如何なる力を果してゐるかを說いたものである。それ自身としての迷信は採るに足らぬものであつても、君主政治や私有財産の如き社會制度の基礎として、實は重要な意義を持つてゐることが明かにされてゐる。しかもその間に、彼の有名な呪術の宗教先行說や王の呪師起原說がその片鱗を現はしてゐる。

譯者はかつて「社會制度の發生と原始的信仰」と題してこの書を譯出されたことがあつた。今度のは舊約とは獨立になされた由で、小見出を附した點、行文の滑になつてゐる點等で進歩を見せてゐる。たゞ舊約には譯出されてあつた脚註を凡例にも斷らずに一切廢してしまはれたのはどうかと思ふ。

ともかくフレザーの學說が、かうした小册子によつて窺はれる樣になつたのは誠に喜ばしい。最後に譯者がかつて試みられたゴールデン・ボー一册本の飜譯を、一日も早く完成せられることを希望してやまない。（岩波文庫版）（中井信彥）

邦彥王行實（久邇宮家御編纂）

本書は畏くも國母陛下の御父宮にあらせらる故久邇宮邦彥（クニヨシ）王の御傳記である。抑〻久邇宮は伏見宮邦家親王第四王子朝彥親王を始祖とせらる。親王は維新囘天史上には、青蓮院宮尊融入道親王（中川宮・久邇宮）と申して重要の役割を演ぜられ、御生涯は變化極りなく頗る波瀾重疊であつた。

邦彥王は朝彥親王の第三王子として明治六年七月廿三日京都に誕生、世志麿（ヨシ）と稱せられ、當時、御不自由勝の御生活の中に成長、傳育役の專心なる輔導にて其の天資は益〻英明を加えさせられ、

寛容の德を富ませられ、二十年二月兄宮邦憲王（後の賀陽宮）病身なる故を以て朝彦親王の繼嗣と治定せられ、二十六年十二月士官候補生として入營、始めて軍務に服せられた。其の間、私立成城學校に在學ありしは特筆すべきで、殊に二十六年明治天皇には侍從を同校に差遣し、王の學習の狀況を參觀せしめられし程、王の將來に對し尠からず御囑望あらせられしと拜察する。三十年一月步兵少尉に任官、以來累進を重ね陸軍大將となり、其の間、陸軍大學に學び、歐米を巡視し、又日露戰役に從軍、赫々たる武勳を樹て、陸軍の要職を歷任せられ、昭和四年一月廿七日御病氣危篤に及び元帥府に列せられ武人としての最上位を極められた。

王は謹嚴高潔にして、常に神威を畏み、至誠を以て皇室に奉仕し、精勵恪勤を以て軍務に服せられ、實に軍民の典型であらせられた。又國民精神の作興、國民敎化の向上、更に航空事業、殖產興業、美術工藝の發達等に心力を傾盡し、指導奬勵せられしは枚擧に遑なき程で、就中聖德太子奉讚會に意を用ひ、力を致されしは世人の記憶の新たなるものである。王は雅號を謙堂と稱し、漢詩・俳句に豐富なる詞藻を現はし、書道には一家の風を成し、筆蹟には雄勁にして崇高な氣品を拜し、繪畫に於ても特種の風格を仰ぐのである。本書收錄の昭和三年四月大和河內地方旅行の御手日記の一節に、

大楠公誕生地を訪ふ、一小阜の上田圃の間にあり、……此所より上下赤坂城趾と敵味方合葬塚等を展望す、余曩に高野山に於て島津義弘が朝鮮役の際の朝鮮人戰死者に對する供養塔を建て居るを見て、今日の赤十字の觀念の夙に我國に發達せるを感じたりしが、今此の地に遊びて大楠公が敵味方合葬の事實を聞きて、更に古昔より我國に於て對敵觀念に一の美風の存せしことを知り、大楠公の奧床しき心根を敬仰せざるを得ず……

とあるは熟讀思考すべき警語である。方今、興亞の大聖戰に際會し、忠靈塔、忠魂碑の計畫建設せらるゝ秋に、如上、我が國古來の美風を重じ、彼の地に建設せらるゝ塔碑は彼我戰歿者を共に慰靈するものとし、他日、平和の昭光將來の曉、彼我民族一團となり、新東亞建設の尊き人柱に對して敬弔の意を表することとしては如何かと思ふ。

終に本書により、炳乎たる王の偉績を、今更欽仰し、合せて久邇宮の御家門の彌〻御繁榮を祈り奉つるものである。（昭和十四、九、廿八、武田勝藏謹記）

日柳燕石

（相原言三郎著　燕石會發行）

讃岐國の奇傑日柳燕石の詳傳の皆無なるに、今次、本書の上梓を見るに至りしは慶賀すべきである。本書は上下兩編に分れ、上編に收錄するところは、燕石小傳——性行——產んだ家——生立ちとその環境——その父惣兵衞——その母幾世女——その叔父石崎靑崗——で、下編は近刊の運びと聞く。玆に本書の新刊を世に紹介するに際し、燕石の略傳を本書によりて左に揭ぐ。

燕石は名を政章、字を士煥、通稱を長松、後、長次郎と云ひ、晩年、耕吉（又は浩吉）と改め、燕石は其の雅號で、別に柳東、芭蕉書屋、撫松樓等十數がある。更に幕末勤王志士との往復には